戦後五十年に思う

宮司代表役員　黒田忠雄

連日の真夏日。ついに連続三十日を超すに至り、東京では、観測史上新記録という。

とにかく暑い。気象庁の出した冷夏の予報がうらめしく感じられる。

それでも、この稿を書いている神社付近のデーターによると、今夏三十度を超えた日は、八月四日（八月三十一日現在）の一日に過ぎない。もう夕べには、秋虫「カンタン」の声を窓辺に聞くようになり、秋の気配も日ごとに深まりを感じさせ、この暑さもあと数日の我慢であろうか。

○　○

五十年前の終戦の日も、異常に暑かったように記憶している。

夏休みを「夏休み」と言わず「夏期鍛練期間」と言う呼び方を、先生に教えられていた。

その八月十五日の正午、はっきりと聞きとることの出来ない玉音放送の流れるラジオを囲んで、祖母、母、疎開に来ていた叔母等が涙を流して、茫然自失していた。

小学校の低学年であり、敗戦がどう言う事態であるか、深く理解できないまま、一緒に頭を下げて、天皇陛下の詔勅を聞いた。

○　○

それから五十年の歳月が流れ去った。各地で戦後五十年を記念しての諸行事が執り行われる中、各界各層に於いて、大東亜の戦いについて、諸々の議論がなされてはいるが、一向に国、政府の考えは改まろうとしない。

毎年繰り返され、聞かされて来ていることではあるが、終戦記念日の政府閣僚の靖国神社ご参拝についても、公式の立場の参拝であるとか、非公式の立場の参拝であるとかの言い訳け、更には参拝をしない国務大臣があるに至っては、語る言葉を持たない。

難しいことは申し上げないが、国家の命令に従って、遠く酷寒の地に、又灼熱の南の島に唯ひたすら祖国の勝利を信じつつ出征し、散華された英霊の眠られる靖国神社に対する国、政府の対応について、このようなものであって良いものか、戦後五十年に際し、改めて心を痛めるものである。

○　○

七月十四日、終戦五十年に当たり、当神社社家および山上氏子のご家庭の戦没者九柱の慰霊祭を神社主催にて執り行なった。

四十三世帯中九世帯に大東亜戦争の戦没者がおいでになり、没年も殆んど昭和十九年、二十年の二年に集中しており、大東亜戦争末期の悲惨さが偲ばれるものである。

遺族、神社関係者、諸団体の長にご参列をいただき、それぞれの墓前に玉串を捧げ、英霊の更なるご冥福をお祈り申し上げるとともに将来に亘る日本の平和のため、努力することをお誓い申し上げた。

○　○

戦争のない平和国家日本であるが、世界に目を向けると、一つの国の中で、異民族同士が、又異った宗教を信ずるグループが、血で血を洗う殺戮が繰り返されており、尊い命が失われている。世界平和は、遠い目標となってしまっている。

あたかも、中国に於ては、核地下爆発実験を平然と実施し、フランスに於いても南太平洋ムルロワ環礁において、近々に行う旨、伝えられている。世界唯一の核被爆国日本として、核戦争の無い未来を心から希求して止まないものであり、これらの実験に反対をするものである。

〔連載〕武州みたけの信仰⑤

櫛真智命について（中）

国学院大学教授
神道学博士
三橋健

クシマチという神名の意味

武蔵御嶽神社に祀られている最も重要な神さまはクシマチノミコトです。

一般には櫛真智命と書きますが、ほかにも久志摩知神・櫛麻知乃命神・久慈真智神との表記も見られます。このうちの久慈真智は、クシマチと清んでよむべきか、あるいはクジマチと濁ってよむのが正しいのか迷うところです。慈という字はシともジともよむことができるからです。

それはそれとして、神名のクシマチやクジマチには、どのような意味があるのでしょうか。それを次に考えてみたいと思います。

まず、クシマチですが、これについては江戸後期の有名な国学者、平田篤胤（一七七六～一八四三）の説がすぐれています。篤胤は、櫛真智命の櫛は櫛石窓神・櫛真田姫命などの櫛と同じで、「奇びな」ということ、すなわち「霊妙な」「不思議な」「神秘的な」との意味であると述べています。クシマチとは「霊妙な真智」ということで、櫛は真智をたたえた言葉なのです。

それでは、真智とは何でしょうか。再び篤胤の見解を聞いてみることにしましょう。篤胤によれば、真智は麻邇と同意であると述べています。麻邇は「ままに」というほどの意味で、この場合は「神意のままに」「神慮にまかせ」「神慮に随う」となります。

このように、真智・麻邇とは「神のみこころを判ずる占い」であり、この霊妙な占いを始められた神が櫛真智命なのです。いいかえますと、神秘的な占いをつかさどる神となります。

また、宮中では重要な卜占をする場合、その場所に卜庭神（卜部神）を二座祭りますが、そのうちの一座が櫛真智命なのです。ちなみに、もう一座は太詔戸命といいます。

櫛真智命と太占祭

ところで、神のみこころを判ずる占いといえば、布斗麻邇（太占）・布斗真智（太町）があります。太というのは「立派な」ということであり、占や町をほめた言葉です。

太占は『古事記』『日本書紀』などにも見えていますから、古くから行われていた占いの一つであることがわかります。その方法については、例えば『古事記』の天の岩屋戸の条に、

天の児屋の命・布刀玉の命を召びて天の香山の真男鹿の肩を内抜きに抜きて、香山の天のははか〔木の名ぞ〕を取りて、占合ひす……

と伝えています。天の児屋の命と布刀玉の命に、天の香山の雄鹿の肩甲骨をそっくり抜き取って、ハハカの木で焼いて占いをさせたと記してあります。

ハハカとは『和名抄』によれば「朱桜（カニワザクラ）」と記してありま